

大伴家持と歌友久米広縄

——越中文化圏最終の帰京饞宴歌群——

佐藤 隆

一 はじめに

令和に生きる者から万葉集を捉える時、大伴旅人と山上憶良を中心とする人々が活躍した空間を、筑紫文化圏と呼ぶことができる。規模に違いはあるが、同様に大伴家持を主に大伴池主や久米広縄が活躍する文芸空間を越中文化圏と捉えることができよう。その中央に居た官人大伴家持の一面は、後期万葉時代の中心的な歌人であり、越中文化圏の中核的存在であり、また、万葉集の編纂者であった。

その越中守時代の歌人家持に注目する時、歌友としてまず大伴池主が挙げられる。家持が歌人として充実した日々を過

ごすことができたのは、掾としてすでに着任していた大伴池主の存在が多大であることは周知のことであり、父大伴旅人に山上憶良が居たのと類似する。ただし、池主の後任には久米広縄が居たのであり、その存在にも目を向けるべきである。

広縄については、すでに「久米広縄とその交友」「ほととぎす」と「どち」を中心に¹⁾にて中国詩文に影響を受けた交友に触れ、「大伴家持の歌学と作品 春愁三首の左注と歌」²⁾にて、交友関係や家持たちの歌学について触れて、二人の文芸空間の背景には中国詩文の受容とともに、それに対峙した和歌作品制作があり、その様子について言及したことがある。

本稿では、越中守時代の最終に目を向け、大伴家持が少納言として帰京するのを契機として生まれた歌群、家持と広縄

とによる離別を根底に置く饞宴での歌群（19四二四八〜五三）を対象にする。この饞宴歌群の背後には池主の存在もあつた。

この帰京時の歌群の範囲については、山崎健司の「越中時代の歌群」³⁾に言及がある。ただし、そこでは帰京の途次に立ち寄つた越前国の池主の館での饞宴以後も視野に入れ、都までの途次に詠出された二種の歌（19四二五四・五五、19四二五六）も歌群に含めて言及するが、二種は京に居住する天皇と諸兄を意識し順次制作された歌である。饞宴に目を向ける本稿とは立場が異なる。

本稿と同じ当該饞宴歌群に対しては、松田聡の「万葉集の饞宴の歌 家持送別の宴を中心として」⁴⁾の言及がある。饞宴の当該歌群に対して漢籍受容を指摘する論究である。松田論は当該歌群が饞宴歌としては一般的でないとし、季節の風物を共有し交友の情を尽くすという漢詩文の伝統的な発想が、旅人とその周辺の人々によって和歌世界に応用され、家持もそれを継承し当該歌群に至つたと指摘する。越中時代の家持や池主たちは、中国文学を明確に意識し漢籍受容を図り、和漢融合を利用して新作品を目指していたと考えているので首肯できる。

本稿では、漢詩文の影響も受けたそれぞれの新作品の具体的な有り様について言及する。

一 久米広縄

久米広縄は、天平二十（七四八）年三月以前に、越前掾として転出した大伴池主の後任の掾として着任している。そして、諸兄の使人田辺福麻呂の越中国来訪では、自らの館で歓迎の宴席を設けている。池主の転出後、家持の下僚として仕え、家持の広縄が朝集使の任を終え本任に帰つた時の歓迎歌（18四一六・一七）や、やはり家持の広縄に贈つた「霍公鳥怨恨歌（19四二〇七〜八）などから、公私にわたつて交友を深めていたと捉えられている。

広縄の閲歴を示すものとしては、諸説⁵⁾が注意するように、『正倉院文書』の天平十七年四月二十一日の「佐馬寮移」に、「少允^{しちゆう}従七位上久米朝臣廣縄」として広縄の記録がある。

広縄の作品は、

卷十八「短歌二首」（四〇五〇、四〇五三）

卷十九「長歌一首短歌六首」（四二〇二、四二〇三、

四二〇九、一〇、四二二
 二二、四二二一、四二二
 五二）
 であり、家持の越中時代を収録した巻十八と巻十九に限られる。

久米広縄歌に付せられた題詞・左注以外に存在する広縄関係の題詞・左注は、

掾久米朝臣広縄が館に、田辺福麻呂に饗する宴の歌四首

(18四〇五二題詞)

四月一日に、掾久米朝臣広縄が館に宴する歌四首

(広縄歌なし) (18四〇六六題詞)

国の掾久米朝臣広縄、天平二十年を以て、朝集使に付きて京に入る。その事畢りて、天平感宝元年閏五月二十七日、本任に還り至る。仍りて長官の館に、詩酒の宴を設けて楽飲す。ここに主人守大伴宿禰家持が作る歌 家持歌 (18四一一六題詞)

判官久米朝臣広縄が館に宴する歌一首

(広縄歌なし) (18四一三七題詞)

二十二日に、判官久米朝臣広縄に贈る霍公鳥を怨恨むる

歌 (19四二〇七題詞)

右二首の歌は、三形沙弥、贈左大臣藤原北卿の語を承けて作り誦めるなり。これを聞き伝えたる者は、笠朝臣子君にして、また後に伝へ読む者は、越中国掾久米朝臣広縄これなり。
 (19四二二八左注)

右の一首、伝誦するは掾久米朝臣広縄なり。

(19四三三五左注)

右、判官久米朝臣広縄、正税帳を以て、京師に入るべし。仍りて守大伴宿禰家持この歌を作る。ただし、越中の風土に、梅花柳絮三月にして初めて咲くのみ
 (19四三三八左注)

七月十七日を以て、少納言に遷任す。仍りて悲別の歌を作り、朝集使掾久米朝臣広縄が館に贈贈る歌二首
 既に六載の期に満ち、忽ちに遷替の運に値ふ。ここに旧きを別るる懐しびは、心中に鬱結れ、涕を拭ふ袖は、何を以てか能く早さむ。因りて悲歌二首を作り、式て莫忘の志を遺す。その詞に曰く、(19四二四八題詞・詩文)
 の9例があり、では家持との深い関わりがみられる。また、「久米朝臣広縄が館」の語が 4例ある。掾

の館を宴席の会場として、多くの作品が生まれている。そこに広縄の作品は多くないが、宴の主催者であり作歌の場の提供者であつたことが推測される。また、「伝へ読む」「伝誦」の語が 2例あり、久米朝臣広縄が伝誦した作品が二首（四二二七～二八）（四四三三五）披露されていることから広縄は古歌にも興味を示し、その古歌利用に腐心する歌人であつた。家持と交友関係を持ち、文芸に意欲的な歌人である。

三 家持帰京の饗宴歌群

では、家持の越中守時代の最終に配置された、家持の帰京と関連する饗宴歌群を眺めてみることにする。

家持は、天平十八（七四六）年に越中国に赴任し、満五年の歳月を過ごした天平勝宝三（七五一）年に、少納言として帰京するのである。いよいよ越中国を離れることになつた前日（天平勝宝三年八月四日）の家持は、

A 七月十七日を以て、少納言に遷任す。仍りて悲別の歌を作り、朝集し使掾久米朝臣広縄が館に贈貽る

歌二首

既に六載の期に満ち、忽ちに遷替の運に値ふ。ここに旧きを別るる懐しびは、心中に鬱結れ、滯を拭ふ袖は、何を以てか能く早さむ。因りて悲歌二首を作り、式て莫忘の志を遺す。その詞に曰く、

あらたまの年の緒長く 相見てし その心引き 忘れぬ
（四二二四八）

石瀬野に 秋萩凌ぎ 馬並めて 初鳥狩だに せずや別れむ
（四二二四九）

右、八月四日に贈る。

を作品を制作する。京に赴き留守である掾久米朝臣広縄の館に贈り置くと云う条件を選択した家持は、短歌二首のみではなく漢文の序も添えた。題詞＋詩序＋和歌の意欲的な作品を制作したのであつた。また、それに続く、帰京に関連する作品群を挙げると、

B 便ち大帳使に付し、八月五日を取りて京師に入るべし。これに因りて四日以て、国厨の饌を介内蔵伊美吉縄麻呂が館に設けて饗す。ここに大伴宿禰家持が作る歌一首

しなざかる 越に五年 住み住みて 立ち別れまく 惜

しき夕かも (19四二五〇)

C 五日平旦に上道す。仍りて国司の次官已下の諸僚皆共に視送る。時に射水郡大領安努君広島が門前の林中に予め饞饌の宴を設けたり。ここに大帳使大伴宿禰家持、内蔵伊美吉繩麻呂が盞を捧ぐる歌に和ふる一首

D 玉梓の道に出で立ち 行く我れは 君が事跡を負ひてし行かむ (19四二五一)

D 正税帳使掾久米朝臣広縄事畢り任に退る。適に越前国掾大伴宿禰池主が館に偶ひ、仍りて共に飲樂す。ここに久米朝臣広縄秋の花を囑て作る歌一首

君が家に 植ゑたる萩の 初花を 折りてかざさな旅別るどち (19四二五二)

E 大伴宿禰家持が和ふる歌一首
立ちて居て 待てど待ちかね 出でて来し 君にここに逢ひ かざしつる萩 (19四二五三)

となる。

つまり、家持は天平勝宝三年八月の四日に、広縄の留守の

館に漢文序も添えた精力的な作品を贈り置き、その四日に、介内蔵繩麻呂の饞宴に参列し作品を残した。翌五日の早朝に多くの下僚に見送られて旅立ち帰京の徒についた。その途中まで付き従った下僚たちは更に宴を開き、そこで歌を披露した繩麻呂に対して歌を返している。二日間になたつて展開された宴席での饞別作品群となっている。

そして、越中から京へは十七日の行程、越前から七日の行程であるから、十四日前後に越前国の掾池主の館に訪れた家持は、偶然広縄と邂逅した。三人は池主の館にてともに「飲樂」し、偶然生まれた交友の好機に饞別歌の機能を持つD Eの贈答作品を制作した。家持作五首と広縄作一首による一群である。

この一群の最初は、饞別の悲歌を一方的に贈り置く家持歌であるが、開かれるべき饞宴を基礎としているので、一群の総称を「帰京饞宴歌群」と呼ぶことにする。

四 Aの悲歌と歌字

では、旅立ちの前日に制作し、任にて帰京し留守となつて

いる椽広繩の館に贈り置いたという、特殊な成立状況を持つAの家持作品から吟味することにする。

作品は、宴席ではない特殊な状況を受けて、題詞と短歌二首に加えて漢文序を添えて、意向を伝えるという形式を採っている。

まず、漢文の序に目を向けてみると、「鬱結」の語が注目される。憶良が既に使用（五八六八）し、家持も愛用する語である。序では、「旧きを別るる懐^なしび」から起こる心中の「鬱結」は、「悲歌二首を作り」、そして「莫忘の志を遺す」ことにするとする。この悲歌を作ることによって「鬱結」を除くとする家持の歌学については、前記した「大伴家持の歌学と作品 春愁三首の左注と歌」ですでに触れたことがある。「万葉の歌学」の橋本達雄説⁽⁶⁾に従いながら展開した論である。それを簡単に紹介することにする。

家持の歌学は、早く天平十一（七三九）年の亡妾悲傷歌群のその萌芽が見られ、亡妾悲傷歌群の最後の題詞「悲緒未息、更作歌五首」に対して、橋本は「この題詞は和歌によって「悲緒」が終焉するまで歌い継⁽⁷⁾ごうという考えのあったことをよく物語るものである。」とした。

天平十三（七四一）年の恭仁京時代には、弟書持からほととぎすを詠む短歌二首を贈られ、それに報える短歌三首を制作した。それには長い題詞が付せられ、そこに「鬱結」の語が用いられていた。

霍公鳥を詠む歌二首

橋は 常花にもが ほととぎす 住むと来鳴かば 聞かぬ日なけむかな
（17三九〇九）
玉に貫く 棟を家に 植ゑたらば 山ほととぎす 離れず来むかも
（17三九一〇）

右、四月二日に大伴宿禰書持、奈良の宅より兄家持に贈る。

橙橋初めて咲き霍公鳥翻り嚶く。この時候に對ひ、詠志を暢べざらめや。因りて三首の短歌を作り、以て鬱結の緒を散らさくのみ。

あしひきの 山辺に居れば ほととぎす 木の間立ち潜き 鳴かぬ日はなし
（17三九一一）
ほととぎす 何の心ぞ 橋の 玉貫く月し 来鳴きとよむる
（17三九一二）
ほととぎす 棟の枝に 行きて居ば 花は散らむな 玉

と見るまで (17三九一三)

右、四月三日に、内舎人大伴宿禰家持、久邇京より弟書持に報へ送る。

である。家持は題詞の中で、「短歌を作り、以て鬱結の緒を散らさくのみ。」とする。

家持の歌学については、すでに多くの指摘があり、たとえ「釋注」も、

ちなみに、当面の前文は、歌は人間の鬱情を展べて撥うものとする家持の和歌観（文芸観）を文章として語り告げる最初のものとして注目される。かような文芸観は、すでに柿本人麻呂や山上憶良などが自覚的に所有しており、上代においては、それがやがて大伴家持へと流れこみ、家持としては、すでに天平十一年（七三九）の亡妻悲傷歌（三四六二―七四）にその認識を覗かせ、今の一文ののちは、折々の段階を経て、天平勝宝五年（七五三）二月、巻第十九巻末のいわゆる絶唱三首（四一九〇―二）に至って、理論と実践との完全な融合を見るに至る。

と説いている。『釋注』のいう絶唱三首の有名な左注（19四二九二）を示せば、

春日遅々に、鶴鷓正に啼く。悽惘の意、歌に非ずして撥ひ難きのみ。仍りてこの歌を作り、式て締結を展べたり。ただし、（以下略）

である。ここでは、「悽惘の意、歌に非ずして撥ひ難きのみ。」とあり、家持の歌学に基づく和歌観が明確に識されている。結ばれた心を晴らすことが出来るのは歌であるとする家持の和歌観は、旅人や憶良の歌学を継承し、また、『毛詩』大序や『詩品』序の「其の一」や『文心雕竜』に見られる詩学から影響も受け、習得した歌学と推定される。

当該の悲別を詠むAの作品全体は、家持が明確に獲得していた歌学に基づいて制作されており、家持はその意図を詩序の中に籠めてることに注意を払うべきと考える。さらに注目したいのは、鬱結をもたらす原因である。書持との贈答歌や絶唱三首では、趣深い時候であつたが、当該歌は「旧きを別るる悽しび」という悲別の情であり、交友と関わる人事である。家持は時候に対して用いた歌学を、歌友との別離という人事に意欲的に用いて作品を制作したと推定する。

では次に、二首の短歌をみることにする。一首目の「心引き」の語については、すでに前記の「久米広縄とその交友

「ほととぎす」と「どち」を中心に「にて」と「とす」と関連させて言及し、ここでは、「心引き」の語に文雅を共有する交友の意があったとした。集中に二例のみの特殊な語で、他の一例は、巻十四の東歌（二五三六）に見られる。この「心引き」の語は、後の広縄のD歌に見られる「どち」とともに触れることにする。

二首目をみると、「石瀬野」にて「秋萩」を押し伏せてその年初めての鷹狩りを想像し、それが実現できないままに別れる悲しみが詠出されている。この秋萩の咲く石瀬野での鷹狩りの世界は、家持がすでに詠出したことがあった。天平勝宝二年三月八日の「八日に、白き大鷹を詠む歌一首」（一五四一五五）に、

秋付けば萩咲きにほふ石瀬野に馬だに行きてをちこちに
鳥踏み立て……

とあった。家持が秋において希求する想像世界であった。この萩の咲き乱れる石瀬野と鷹狩りの想像世界と同種の世界が、二首目を制作するおりにも大きく働いていると推定する。

また、家持たちにとって秋を象徴する花は、「萩」であったことに注意を払いたい。広縄も家持も当該歌群の中で再び

「萩」に注目することになるからである。

以上、越中国を去ることになった家持は、慣習的に開かれる公的な饗宴を前に、任にて当地にいない歌友広縄との別れに際し、館に作品を贈り置くという特殊な手法を創出した。そして歌字に基づく漢文序を作成し、そこに交友と景を取り入れて二首の悲歌を加えて一作品として完成させた。これにて相手不在の特殊な帰京饗宴歌が成立することとなった。

五 BとCとの家持歌

では四日夕方と五日早朝の家持作品に目を向けることにする。題詞の「国厨の饌」「饗饌の宴」の語が示すように、いわゆる饗宴歌群である。

Bの家持歌は、掾広縄が居ない越中国庁において、介内蔵伊美吉縄麻呂の館でいよいよ翌日旅立つ家持を迎えて、越中の官人たちが集う公的な饗宴で披露された作品である。上二句の「しなざかる越に五年」の語句は、諸注が説くように憶良の「天離る鄙に五年」（五八八〇）を受けていると推察される。憶良の「鄙」を「越」と置き換え、そこに「住み住み

て」と詠出することによって、越中国への愛惜を強調している。下二句の「立ち別れまく惜しき夕かも」とともに、任を終えて帰京する官人の、典型的で模範的な饞宴歌と捉えることができる。

この家持歌は、その翌日の歌である。家持は早朝に立出し、介の縄麻呂以下の国庁の下僚や、諸郡の長官である大領（地元の豪族か）たちが、別れを惜しみしばらくの間家持に付き従った。その中の一人である射水郡大領の広島は、越中国府が所在する郡の大領であるので門先に最終の饞別の宴を設けた。そこで詠出されたのがこの家持歌である。長い題詞と下二句に特異な表現を持つ饞別歌である。

饞別歌の下二句の「君が事跡を負ひてし行かむ」の「事跡を負ひてし」の表現は特異な表現である。早く契沖の「代匠記（精）」が、

事跡八行事ノ蹤迹ナリ。旅二ハサマノ具ヲ持物ナレハ、ソレニヨセテ、君力功勞ノ事迹ヲ記シオケルヲ負持テ、都へ上リテ具ニ申上ムトノ意ナリ。（以下略）

とし、従来通説となっている。この契沖の説に対して『釋注』

は、

これは、あなた方の数々の努力・功績によって助けられた、俗にいえば大いに世話になったという謝辞にすぎないのではあるまいか。（中略）

部下たちの多年の労苦に対する謝意をしゃれて述べた表現ではないかと思う。功績を都で具申しようというのは露骨に過ぎ、家持らしくないように思う。

とする。契沖の『代匠記』が、旅に携帯する様々な持ち物があるように、功勞を記した書類を持参し、都で具申する意と捉えているのに対して、伊藤『釋注』はそれでは露骨に過ぎるとし、「謝意をしゃれて述べた表現ではないか」とした。

その「しゃれて述べた表現」に目を向けるとき、注意したのは、家持の作品の幅の広さである。若き家持は、

瘦す瘦すも 生けらばあらむを はたやはた 鰻を捕ると 川に流るな （16三八五四）

などに代表される戯笑歌を作成し、越中守時代の家持は坂上郎女との相聞歌贈答において、

姑大伴氏坂上郎女、越中守大伴宿禰家持に來贈せたる歌一首

常人の 恋ふといふよりは 余りにて 我れは死ぬべく

なりにたらずや

(18四〇八〇)

片思ひを 馬にふつまに 負ほせ持て 越辺に遣らば

人かたはむかも

(18四〇八一)

越中守大伴宿禰家持が報ふる歌と所心と三首(内二

首)

天離る 鄙の奴に 天人し かく恋すらば 生ける験あ

り (18四〇八二)

常の恋 いまだ止まぬに 都より 馬に恋来ば 荷なひ

堪へむかも (18四〇八三)

の作品を制作している。ここでは相聞歌の世界で戯笑の表現を利用して、二人の親愛の情を確認している。ここには「片思ひを馬にふつまに負ほせ持て」とこの歌の「負ひてし行かむ」に類似する語句も用いられていた。このような家持を想起するとき、『釋注』の「しやれて述べた表現」を越えた、家持の文芸的な意図が推察される。

家持は、あえて功績を都で具申しようという露骨な表現を用いることにより、戯笑の世界を呼び込み、最終の饞宴に参加した人々の惜別の情に対し、笑いを籠めて明るく応じたのではないか。旅立つ前日の公的な饞宴では典型的な饞宴歌を

詠出し、早朝出発した道中では、斬新さを加味した新饞宴歌を詠出していると捉えたい。

今一つ注意したのは、C歌の詠出した歌に付せられた長文の題詞である。C歌の題詞は、一般の題詞と異なり家持が詠出にいたる具体的な状況が、「平旦」「射水郡大領安努君(広島が門前の林中に予め饞饌の宴を設けたり)」「伊美吉(繩麻呂が蓋を捧ぐる歌に和ふる)」の語句を用いて、時間・場所・状況・動作など事細かに記されている。つまり、早朝に別れを惜しむ多くの人々と旅立つた家持は、大領(広島)の門前まで至ると、林中に最終の饞宴が設営されていた。饞宴が始まり見送る人々を代表し(介の繩麻呂が、家持に蓋を捧げながら歌を披露した。それに和して家持が詠出したと伝えるのである。饞宴での和らいだ様子が動画を見るように見事に再現されている。ここには、歌を披露した後の歌稿筆録においてその題詞に腐心する家持の姿が想像される。文字で記るされた作品を享受する者を意識した、文芸的な題詞として捉えるべきである。

B歌は模範的な饞宴歌を、C歌は歌内容も題詞も意匠を尽くした作品と捉えべきであろう。

六 DE歌の「どち」

では、その後のDEの広縄と家持による、越前国の池主の館にて生まれた贈答歌をみることにする。

掾久米広縄は、正税帳使の任を終えて任地の越中国に帰る途中に越前の掾池主の館に寄った。家持は、少納言・大帳使として越中国の守の任を終えて都に向かい、やはり越前の池主の館に寄った。『私注(土屋)』は「あらかじめの打合もあつたのだらう」とするが、Eの家持歌をみると偶然性も否定できない。この邂逅に、家持、池主、広縄の三人がともに喜び、「飲楽」したときの贈答一首である。

特に、家持は越中国を離れるに際し、広縄の留守宅にAの悲歌を残してきた。その歌友との再会は特別の感情があつたと推察される。

この饞宴歌一首に対して『釋注』は、

池主の歌はないけれども、「君が家に植えたる萩の初花」の「君」はむろん池主をさすもので、上三句には「萩も初花」に主人の丹精・風流をほめる心があり、一首には

池主という人間も躍動している。結句の「旅別るとち」も、越前に残る者、都へ旅立つ者、越中へ向かう者、その三人が別れ別れになることをいうもの。散り散りになつてしまふのだから、今こそひたすら心を尽くさむかなというのである。広縄の歌は合わせて九首(うち長歌一首)中で、広縄という、家持のこよなき信望を得た人物も、この歌をもつて、『万葉集』から姿を消す。

と説いている。

広縄の「君が家に植えたる萩の初花」の「君が家」や「植えたる萩の初花」には、『釋注』が述べるように、風流を愛する池主への広縄の並々ならぬ配慮があり、また、松田説のように中国詩文の交友詩からの受容による季節の風物としての萩の利用もみられる。

また、「旅別るとち」の「どち」の語は、『釋注』が説く以上に注目すべきである。前記したように、この「どち」については、「久米広縄とその交友」「ほととぎす」と「どち」を中心に「にて、広縄の越中国での文芸活動の中ですでに言及したので、要約を紹介する。

そこでは、まず家持と広縄との贈答歌(19四二〇七〜八・

19四二〇九、一〇「ほととぎす」に注目し、二人にとつて「ほととぎす」は詩的感興が湧き起こす特別な鳥であることを確認し、その「ほととぎす」歌を贈答することにより同じ文芸の世界を共有し、中国文学の交友詩と対峙する交友歌を制作していると論じた。

次に、当該歌群A歌の「心引き」とD歌の結句「旅別るどち」に言及した。「厚情の意を持つ「心引き」の語には、さらに文雅を共有する歌友のとしての「厚情の意が含まれている」とし、「旅別るどち」「どち」の語にも、『古義』などが説く「俗に同志といふ意なり」を越えて、辰巳・池田⁷が説くように、六朝文学の交友詩を意識しそれを背景に、独自の作品を制作享受し共有する同志の意が存在しているとした。「どち」の語は家持が多用する「思ふどち」の語の類語と考えられるが、その成立状況は家持と池主が盛んに文芸交流した天平十九年三月に見られる。具体的には、三月二日に池主は家持に作品に添えて漢文の書簡（17三九六七）を贈り、そこに君子の交わりの意を持つ「淡交」「蘭蕙」漢語を用いた。翌三日、その池主の漢語の意を理解した家持は、「更贈歌」（17三九六九）の作品にて、倭語の「思ふどち」の語を用い

て漢語の意に応じており、ここに意味深い語が誕生したと説いた。

この様に「思ふどち」を捉え、関連する「旅別るどち」に注目するとき、この語を用いた広縄の意図が推察される。広縄は、家持と池主との間で生まれた「思ふどち」を継承し、家持と池主の三人が邂逅したこの当該の飲楽の場であるからこそ、意識的に「どち」の語を用い、中国文学に対峙した越中文芸を共有する「仲間」の意味を加えたと推定する。つまり、当該歌は、これまで三者によって育んできた越中国文芸を共有する同志の意を深く籠めた作品なると考える。

また、贈答歌D Eの広縄歌と家持歌には「君」の語がある。特にEの家持歌の「君にここに逢い」の語は、三者の強い結びつきをしめす働きを担っていると推察する。Dの広縄歌の「君」は池主を指し、Eの家持歌の「君」は当然広縄を指すが、その広縄は池主の館に居たのであった。また、広縄のD歌には「釋注」が指摘するように、「君が家に植えたる萩の初花」とあり、「主人の丹精・風流をほめる心があり、一首には池主という人間も躍動している。」ことになる。贈答歌は三者の存在で構成されている。

両首は広縄と家持との贈答歌であるが、そこには池主の存在が明確に存在し、歌友三者の仲間が集い文芸に遊ぶ様子が反映されていることに注意すべきである。

七 DE歌の「萩」

まず、この広縄と家持との贈答歌は秋の代表的な風物である「萩」を中心として展開している。その背景には中国詩文の影響がある。松田論が言及するように、中国詩文では饗宴において季節の風物を共有し交友の情を尽くす作品が多く見られるからである。

秋の風物の中で「萩」を選び取っていることにこだわってみる。越前国掾の大伴池主の館に立ち寄った広縄は、館の主人池主が丹精込めて育てた萩が美しく咲き始めた様子に心惹かれ、萩の初花を中軸に置いてD歌を詠出している。広縄は、家持とともに「ほとぎす」歌を多く残しているが、花にも詩的感興を示し、「藤」(19四二〇一)「ヤナヅシ」(19四二二一)を詠んでいるので、この趣向に不自然さはない。

ただし、その広縄が「萩」に執着する契機として、池主の

館に植えられていたこと以外に注目したいことが今一つある。すでに指摘したように、このA-Eの帰京饗宴歌群の最初に位置する、広縄の館に贈り置いた家持のA歌二首(19四二四八・四九)の二首目には、「石瀬野に秋萩凌ぎ」と「萩」の語が存在し、萩の咲き乱れる秋景が鷹狩りの様子とともに詠出されていたからである。

この家持歌は、広縄の留守宅に贈り置かれており、広縄はこの作品の世界を享受することが出来なかったのであるが、家持と広縄は運良く池主の館で邂逅したのである。家持は贈り置いた広縄への悲別作品を、思いがけないこの幸運な機会に披露しなかったのであろうか。『釋注』は、

この場合、池主館において、かの文章や歌を留守宅に贈り⁽⁶⁾貽してきたことを家持が広縄に告げたかどうか。歌に「立ちて居て待てど待ちかね出でて来し」とうたって意はつくしているから、そこまでは言わなかったと考えた。しかし、真相は不明。

と説き、披露しない方向に傾いている。

『釋注』は、「意はつくしている」とし、歌を再び披露をしなかったとするが、この「立ちて居て待てど待ちかね出でて

来し」の表現は、悲歌とその贈り置かれた背景が披露されていたからこそその表現と捉えることもまた可能である。

前述したように、広縄はD歌で池主を「君」と詠出し、家持は和するE歌で、「君にここに逢ひ」と「ここに」の語を加えて、広縄とともに池主の存在を視野に入れ、三者の歌友としての交流を背後に置いて詠出している。つまり、この贈答歌の享受者はもちろん当人同士であるが、ここには館の主人池主も意識的に加えられ、三者で成り立つていることに注意したい。

この宴以後、越中の掾の館に帰り家持の贈り置いた作品を見ることのできる広縄は別として、越前国に居住し久しぶりに会った歌友池主は、今後その作品を見ることが不可能である。家持は「共に飲楽」する歌友池主を前に、贈り置いた悲歌作品を披露しなかつたとは思えない。家持は贈り置いた以前の悲歌を、池主と広縄の前で披露し、三者でともにその作品世界を楽しみ飲楽したと推察する。

この様な背景を考えると、館に贈り置いた作品中の「萩」は三者の共有する花となった推察する。そしてその「萩」と目前の「萩」が契機となり、D Eの贈答歌が完成したと推定

される。そこでの「萩」は、場所を野から館の庭に移し、姿を「初花」と変えて再登場することになったのである。

さらに付け加えると、贈答歌二首には「折りてかざさな」「かざしつる萩」とあって、萩を挿頭にすることが強調されている。たんに初花を賞美するに留まらず、折り取って髪に挿し花飾りにしようと詠んでいる。花や木を髪に挿すことの本来の目的は、感染呪術（まじない）によつて生命力を得て幸いを願うことであったが、次第に呪術性は薄れ装飾の機能が中心となった。ここも三者の邂逅を喜ぶ宴席において行われた行為である。交友の飲楽する集いにて、池主の丹精込めて育てた萩を折り取って、風流な装飾品として髪に挿し、ともに風雅の楽しい時間を共有しているのである。後になるが、同種の歌が家持に、

秋風の 未吹すゑきなびく 萩はぎの花 共にかざさず 相あひか別れむ
(20四五―一五)

とある。また、歌群全体の構成に目を向けると、「萩」の存在はさらに大きくなる。つまり、A歌からD E歌までの帰京饞宴歌群では、「萩」が初めと終わりに存在し、それが一体性を示

して帰京餞宴歌群として主張していると推察する。

八 歌群のゆくえ

本稿では、餞宴に視点を置いていたので、この帰京餞宴歌群で区切りとなるが、帰京という視点では、以後に、

京に向かふ路の上にして、輿に依りて予め作る侍宴応詔の歌一首 并短歌
(19 四二五四・五五)

左大臣橘卿を寿かむために予め作る歌一首

(19 四二五六)

の家持の特異な依興歌と予作歌とがある。家持は都までの途次にて、天皇と諸兄を視野に歌を順次制作しているのである。「侍宴応詔の歌」は、この時点では讓位していたが聖武天皇を意識して作歌し、「左大臣橘卿を寿かむために予め作る歌」は、諸兄を強く意識していることはいうまでもない。

『釋注』¹⁹ は、家持の帰京に視点の中心を置き、

事に関連して筆者は思う。「遷替の運」に依じて広縄の館に残した「莫忘の志」の歌(四二四八〜九)以下、次の橘諸兄に対する寿歌(四二五六)までの九首は、帰京

直後に家持が整理し、諸兄の許に挨拶に参上した時に、帰任報告のとりあえずのしるしとして諸兄に献上したのではないかと。

と、当該の帰京餞宴歌群に依興歌と予作歌とを加えて考察し、A歌からこの依興歌と予作歌までの一連を、帰京関連歌群と捉え、諸兄に献上したとする。「筆者は思う。」の語が記されるように推論であるが、諸兄に献上した可能性はある。

ただし、依興歌と予作歌は餞宴歌ではないことも重要である。家持は第一段階では帰京に関わる餞宴歌群を制作し、次の第二段階では帰京途次の帰京関連歌を詠出したのである。同じ帰京関連ではあるが詠出される場は異なっているのである。

したがって、前記した家持の歌群と編集に論究する山崎は、「越中時代の歌群」において、帰京時の歌群を本稿と同じく、広縄と家持とのD Eの贈答歌までとするのであった。

末四巻が現在のように編纂される以前のある段階において、当該歌群や依興歌・予作歌が諸兄に献上されたとの想定も認められるが、一方、家持の越中守時代また越中歌壇を意識し

て末四巻を眺めるとき、越中歌壇の家持とその歌友たちが、訪れた惜別を胸に越中歌壇の最後のまともとして制作したと推定され、記念すべき最終歌群であると推定する。

九 おわりに

現在の『万葉集』は、家持の越中守時代に詠出された多くの歌に対して、初めも終わりも明確に示していない。大伴坂上郎女が家持に贈った二首（17二九二七～二八）にて漠然と始まり、池主たちの宴席歌が続いている。その終わりも同様であり、当該の帰京饞宴歌群にて越中守時代は終わりを告げるのであるが、述べたように越中国でなく京を意識した依興歌と予作歌も存在するのであった。

しかし、越中に居住しその風土の中で生きた家持たちにおいては、明確に越中守時代が存在していた。この時代意識に立つとき、当該の帰京饞宴歌群は最終歌群としての意味を持つことになる。そこで本稿では、その最終の帰京饞宴歌群のA歌からDE歌までの有り様を具体的みてきた。

Aの悲別歌では、留守宅に贈り置くという特殊な作品披露

の形態を採用するとともに、その作品では漢文序に家持の歌学が示され、「心引き」の語を用いて歌友との年月を振り返り、希求する秋萩の咲き乱れる石瀬野での鷹狩りを描いて悲別歌としていた。

BCは、旅立ち当日の公的な饞別の宴席歌である。その宴において家持はまずB歌にて典型的な饞別歌を詠出する。続いてC歌では「君が事跡を負ひてし行かむ」の語を用いて、戯笑の世界を加え、惜別の悲しみの中にあつた官人たちに笑いが持ち込まれた新饞宴歌であることに言及した。また、歌稿の記載にあつて付せられた題詞に、こまやかな饞宴状況が文芸的に記された新作品であることに注意した。

DEの広縄と家持の贈答歌では、「どち」と「萩」の言及に力点を置いた。「どち」と表現する背景には、家持と広縄そして池主の三者で育んできた中国詩文に対峙する越中文芸それを共有する仲間の意が籠められていたとした。また、Dの「萩」の語は、Aの家持歌が詠出した石瀬野に咲き乱れる萩の秋景が広縄に残影として残り、そこに池主の館の咲き始めた萩を見つけ、中国詩文の交友詩の影響も受けて家持への贈歌とした。それに和する家持も、その萩を髪に挿しともに

風雅を楽しく共有する交友の様子を詠出して心じ、中国詩文に對峙した越中歌壇を閉じているとした。

以上、当該歌群は集中に多くある饞宴歌群の一つであるが、その歌の制作状況や歌の形態、詠出内容には、ひととき工夫が加えられ多彩に詠出された歌たちで構成された作品群であることを論じた。卷十九の編纂以前のある段階において、家持や広縄の意識の中に越中守時代の越中歌壇の最終歌として制作する自覚があり、家持にはそれを最終饞宴歌群としてまとめ上げる意図が存在したと推察する。

注

- (1) 「久米広縄とその交友 「ほととぎす」と「どち」を中心
に」『美夫君志論攷（加藤静雄先生古稀記念論文集）』おうふう、二〇〇〇年一〇月。
- (2) 「大伴家持の歌学と作品 春愁三首の左注と歌」『中京大学上代文学論究』¹²、二〇〇四年三月。
- (3) 山崎健司『大伴家持の歌群と編纂』『越中時代の歌群（巻第十七から第十九の歌群）』塙書房、二〇一〇年一月。
- (4) 松田聡『家持歌日記の研究』『万葉集の饞宴の歌 家持送別の宴を中心として』塙書房、二〇一七年一〇月。
- (5) 廣岡義隆「久米廣縄慰勞の家持預作歌について 遡る時と

景物の表現」『三重大学日本語文学』第一一号、二〇〇〇年六月や、各注釈書など。

- (6) 橋本達雄『大伴家持作品論攷』『万葉の歌学』塙書房、一九八五年一月。

- (7) 辰巳正明「交友の詩学」『万葉集と比較詩学』おうふう、一九九七年四月、池田三枝子「家持・池主の交友観」『古代文学』37、一九九八年三月。

- (8) 下田忠『万葉の花鳥風月 古代精神史の一側面』おうふう、二〇〇三、一〇。